

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	宮沢賢治と中国に関する研究：西域童話と中国における受容を中心に
Author(s)	劉，春燕
Citation	
Issue date	2017-03-25
Type	Thesis or Dissertation
URL	http://hdl.handle.net/2298/37844
Right	

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
氏名 劉 春燕

【論文題目】 宮沢賢治と中国に関する研究 -西域童話と中国における受容を中心に-

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、近代日本の韻文と散文での表現活動を中心に多方面で活動した宮沢賢治(1896-1933)を考察の対象として、第一に中国と西域地方を舞台とした「西域童話」と通称される創作群の検討、第二に宮沢賢治の文学の中国語圏における受容史の分析、という二つのテーマの設定を通して、宮沢賢治文学と20世紀前半から21世紀現在に至るまでの中国文化の間に存在した双方向的な関係を検討した論考である。

本論文全体は、序論、第一編（全三章）と第二編（全三章）、そして結論から構成されている。序論は、宮沢賢治と中国との関係を考察することで賢治研究の発展を目指すという本論の方向性を提示した上で、本論の基本構成と研究方法を論述する。そして第一編では、宮沢賢治による西域地方を描写した創作群の中から、第一章は1920年代の「マグノリアの木」「インドラの網」の2作品を対象に、賢治が法華経信仰へ向かう契機を与えた島地大等とその編纂した『漢和対照妙法蓮華経』からの影響を検討する。第二章は、前2作品とともに「西域異聞三部作」と通称される作品「雁の童子」を分析し、その典拠となった仏教説話と賢治の仏教思想について論じる。そして第三章は、1931年発表の中国を舞台とした作品「北守将軍と三人兄弟の医者」を対象に、同時代の満州事変を背景とした反戦的性格を持った作品として評価する。第一編の考察を通して、一連の創作群の背景に存在した賢治の法華経信仰を基盤とした中国と西域地方への持続的な関心が探究される。第二編は、もう一つのテーマである中国での宮沢賢治受容の諸相を論じる。まず第四章で詩人の草野心平らにより中国国内で創刊されて賢治も詩を寄稿した1920年代の文芸雑誌『銅鑼』掲載の賢治作品を分析し、日中両国の青年が参加したこの雑誌が持つ文学史的重要性を考察する。さらに第五章では中国での賢治文学受容について1940年代の銭稻孫による賢治作品の中国語への翻訳を検討し、第六章では、現代中国における賢治文学の受容について、詩集『春と修羅』の中国語訳の訳出法の分析を行っている。第二編を通して、賢治文学がその展開と受容の両面において近代中国と密接な関係を保持したことが強調される。結論では、西域地方を舞台とした作品群に顕在化する賢治の法華経信仰と中国の関係性を考察する重要性を指摘し、それらの作品群を現行の通称「西域童話」ではなく賢治自身の語を使用して「西域因果物語」として再定義することを提案する。そしてそれらの創作群を通して中国に対して賢治が示した関心と、中国での賢治文学の受容の両方を同時に考察する研究の意義が論じられる。

賢治研究において賢治と中国の関係を検討する先行論は存在するが、本論文は新たな知見と独創的な分析を含む。その新知見と独創性は、以下の四点に要約される。第一に、西域を舞台とした創作群における島地大等『漢和対照妙法蓮華経』等の仏教思想の反映を詳細に考察し、一連の創作群に「西域因果物語」という新たな定義を与えたこと。第二に、中国で発行された雑誌『銅鑼』掲載の賢治作品について、この雑誌の性格を考慮した上で総合的分析を行ったこと。第三に、銭稻孫による賢治作品の翻訳について、中国語能力を活かしつつ詳細な再評価を試みたこと。第四に、2015年刊行の最新の中国語訳『春と修羅』についての賢治研究では最も早いと考えられる分析を行い、多様な翻訳上の課題を提起したこと。本論の第一編と第二編は、総体として賢治文学と中国文化の間の双方向的で密接な交流のあり方を示している。

以上の通り、本論文は、宮沢賢治と中国との関係の分析を通して日本の近代文学の研究において新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、平成29年1月26日（木）に実施した口頭試問において、博士学位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また平成29年1月28日（土）に開催された学位論文発表会において、博士学位論文の主旨についての的確な発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査	坂元	昌樹
委員	西槇	偉
委員	屋敷	信晴
委員	竹島	一希
委員	福澤	清